

KSKQ イマージュ

2017年11月

1991年9月3日 第三種郵便物承認 毎月(1・2・3・4・5・6・7・8の日)発行

アイホール
提携公演

さ迷える愛「序」

翠青明の城

作・演出 芸術監督 金満里

演奏 中島直樹 (ドラムス)
音かつぶしたまこ

劇態変 66回公演

それは透明であくまで純粋な

それは、硬質なのか、こわれやすいのか

それはもろく儂いものなのか

そしてあなたは・・・

2018年

1月13日(土) 18:00

1月14日(日) 13:00 / 17:30

A・HALL アイ・ホール

兵庫県伊丹市伊丹2丁目4番1号
TEL.072-782-2000

JR伊丹駅前 阪急伊丹駅より東へ徒歩7分

自由と心の旅について

愛について、いろんな人が語ってきたであろう、ことごと

不確実性という言葉が流行った時代よりも、その真実味は高まる現代に生きている。

そのリアリティーの代償のように、より強固に求めて止まぬのが、

愛、になっているのではないだろうか。

肯定的にしか語られない、愛について、求めれば求めるほど退いていく愛の持つ虚構性も、

反面の真実として問われないと嘘だろう。

その、人の心の不可侵な領域へ分け入っていくことを、態変の身体一つの表現で、

愛の行方について先ず、城、に取り組んでみたいと思う。

愛の城、と言われ、実態のない愛を如何にもデコレーションする囲いとしての、城。

しかし、その城の形を問題にする以外に、愛の中身を掴むこともできない。

どんな、容器としての、城、を思い浮かべることができるだろうか…。

そんな、これまでとは一風変わった、態変の実験に是非ともお立ち会いたいただきたい。

金満里

翠晶の城 パフォーマーインタビュー

はじめに

今回の作品で、態変の身体は、いよいよ「愛」と向き合う。態変が敢えて避けてきた「愛」。現代社会においてその「愛」のさ迷えるありさまを、「城」というメタファーを通して描こうとしている。

十一月五日。

メタモルホールでの稽古は緊張度を増していた。

今回、態変の稽古にはじめて関わる新人スタッフの目からは、パフォーマーたちが毎週の稽古に集う、それ自体に要する舞台表には出ない膨大な努力に驚いた。体温調節機能もそれぞれに異なる。運動麻痺で動かない四肢ゆえ極度に冷えるパフォーマー、四肢欠損のため体温がすぐ上昇するので室内温度は上げれないパフォーマー。もちろん、「抱え移動」の際の重心の位置も異なる。畢竟、健常者である黒子やスタッフには、パフォーマーの身体への高度に繊細な共感が求められる。その上今回の役作りは、パフォーマー自身の主体性に極限まで委ねられている。

同時に、パフォーマーが黒子やスタッフとどう関わるのかも問われている。「パフォーマーが黒子を育てる」とはどういうことなのか？

稽古後のメタモルホールで、パフォーマーたちに問うてみた。

— 「愛」「城」という言葉から何をイメージし、今回の作品でどのようにそれを表現したいと考えていますか？

渡辺 「愛」なんて、正直深く考えたことがなかった。というより、目をそむけてきたのかもしれない。

「やってあげよう」「手伝ってあげよう」…、それは愛とはいえない、そう思いながら言葉にできなかった。

毎回の稽古で、「城」というモチーフについて考えていくうち、自分自身がこれから歩んでいく人生の「壁」そのものだと感じるようになっていく。「何かちがう」そう思っても言葉が出ない。自分をかくしてしまう。その「壁」と「城」が重なる感じ。

「城」とどう向き合っていくのか、「富豪」という自分とは最も縁遠い(笑)役を作っていく中で、自分自身が試されているなと、そう感じている。

下村 僕の場合、態変での表現は自分自身の生活と密着している。普段自分が生きている日常の生活空間から表現が湧き出してくる感じ。

「愛」という言葉は、僕の日常の中では不安定なもの。人とつながり、その人を信用できるか、障害者として生きるということは、そのベースにいつも揺らぎを感じて生きるということ。「貧乏」という役を通して、僕にとっての愛＝本当のつながりはあるのか、考え表現してみたい。



小林 「愛」とは本来無条件なもので、互いの存在をまるっと認めることなのだと思う。けれども人にはいろんな属性のちがいがあって、それに優劣をつけたり身勝手にカスターマイズしたりしている。人にはいろんなものがくっついていて、純粋な存在価値が見えなくなっている。

それだけでなく、優劣それぞれが自分を守るうとして「城」を築いている。

私の中でその「城」は、西洋の暗い古城のイメージ。人の恨みや無念さ、そんな負のものが黒くよどみ、ものすごい重力で人の負の情念を引きずり込んでいくブラックホール。引きずり込まれたら最後、自分と周りの境界線が見えなくなり、身動きが取れなくなる。

「ニート」という役は自分の過去とも重な

翠晶の城 パフォーマーインタビュー



る。自分の存在価値が見えず、負の情念にどろしようもなく引きずり込まれていた。

ただ、それを今回の作品で「出そう」とは思わない。「無心」になることで「表れてきてしまう」もの、それは自分の到達点そのものでうそがつけられないもの。けれども、「表れすぎてしまう」ものだからこそ、自分自身がはっとさせられるワクワク感が得られる。「無心」の中から「出てくる」ものに、自分の存在を気づかされる瞬間。そんな表現をめざしたい。

小泉 子供のころ、「何でも自分でできるように」と施設に入れられた。子供心に、大人のご都合主義を感じた。「愛」は押し付けられるもの、めっちゃくちゃ気持ち悪いもの。けれども確かに、この人といっしょにいた

い、一緒に何かやりたい、そう感じる瞬間があつて、それを「愛」というのであれば、「愛」には大きな可能性がある、とも思う。その可能性は何なのか。それを探っていくことが、この作品で表現することそのもののような気がしている。

—黒子との関わりかたについて、どのようなことを考えていますか。

渡辺 黒子、とひとことで言っても、いろんな黒子がいる。経験が長く言葉で説明しなくてもわかってくれる人、最近入ってくれたばかりの人、話しやすい人、なんとなく遠慮してしまう人。

今のところ、その人その人の空気や距離感を読みながらいろんなことを頼む感じ。結局、「自分をかくしてしまおう」「相手次第で受身」という自分の課題とつながっているような気もする。

下村 黒子とは相棒、という関係が理想。一緒に作品を作っていく相棒。ただ、そういう対等な関係になるにはいろいろと難しいことがあると思う。本当の信頼関係がないとそうはならない。その意味では、今回の作品のテーマとも直結しているなと感じている。

小林 まずパフォーマーが黒子に何をどうしてほしいのか、言葉で伝えることが大切だと思う。ただ、自分を伝えるというのは、障碍者の場合特に難しい。パフォーマー自身がまず自分のことをわかっていないと。つまり、

黒子と関わるということは、パフォーマー自身が成長しないといけない、ということなのではと思っている。

小泉 もっとパフォーマーと黒子との間で緊張感があるべきだと思う。反発ではなく、緊張感。互いが自立した上で、言うべきことはつきり言っていく。

とはいえ、自分は、というまだまだ。その意味で、今回の作品は、パフォーマーとしての自立への第一歩だという感じがしている。

.....

おわりに

一切の台詞を排除し、ただひたすらに身体表現の普遍性を追求する態度。

本番に向けた毎回の稽古を通して、そのパフォーマーたちのそれぞれの思いは、あるいは重なり、あるいは個々に形を変えていく。見据える先はそれぞれに、けれども全ては道半ば。

さ迷える愛し序、の行く先はまだ誰にもわからない。(編集部)

公演評

「何かが変わる」

金満里 『寿ぎの宇宙』

志賀 信夫（批評家）



筆者は一九七七年の大野一雄の舞踏をきっかけに文章を書き始めた。その関係で、二〇〇三年の劇団態変の東京公演の際に金満里にインタビューし、二〇〇五年からの大野一雄フェスティバル公演、二〇一六年の東京の座・高円寺『ルンタ』などを見てきた。今回の東京公演に協力し、さらに企画を出して、『劇団態変の世界』（論創社）を編集した。

金満里のソロは大野フェス以来だが、身体の存在の強さと、舞台の力に改めて惹きつけられた。最初に下手から紐を引きながらゆっくりと移動してくる金の姿を見て、「動く」ことの大きさを感じた。紐の先に人形たちを乗せた車が登場する。それを並べた姿は亡くなった団員たちだ。酒を手向け彼らを舞台に召喚し、ともに踊る金。次の場面で金は舞台を転がる。その動き一つひとつが日常的ではない。舞台中盤からの音楽とともに徐々に舞台の感動が高まっていく。チョゴリに烏帽子の金の美しさ。舞台中心で円形に開いた衣装の

中の金の姿には、だれしも惹きつけられた。三日間見続け、そのたびに感動した。

初日の作家田口ランディとのトークは、涙を浮かべるほどの彼女の想いに観客が共感し、親しみを込めて金を語る姿に引き込まれた。二日目は詩人吉増剛造と能楽師津村禮次郎と金とのシンポジウム。吉増の言葉の詩的表現が広がるなかで、自由を常に求める金と吉増に対し、「型」の中にある自由を津村は求めるのが対照的だ。最終日、美学者谷川渥とのトークでは、構成の巧みさ、さらに身体表現への率直な賛辞を谷川が述べた。

初めてこの舞台を見た人が、「見ていていいのかという気持ちになる」と言う。だが、ある観客は、そういう思いを抱え込み、しばらくして再び見ると、「意味が変わった。何か自分が変わっていた」とアフタートークで発言した。金満里の舞台、劇団態変の舞台は、見る人を変えるのだ。「身体表現」として自分の動きを見せ、強い表現の意志を持って舞台に立つことが、見る人を変える。いずれの日も、このような観客の体験に基づく質問との対話が、全体の感動をより高めた。この「リアル」に意味があるのだ。

這いずる、転がるといった動き。動けない体が徐々に動いていく。その原初的な感動がここにある。それは生のエネルギーそのものであり、表現の根源といってもいい。「見たいけど見たことがない」という人が、まだ周囲にいるだろう。ぜひ見てほしい。そうすれば、何かが変わるはずだ。

劇団 態変は2018年度 新規継続 賛助会員を募集しています。

劇団態変は、2012年4月に賛助会員制度を設けました。行政からの補助金を受けず、身体障害者である態変のパフォーマーが主体となり芸術創造活動を行っていくため、資金面でのご協力を市民の皆様にお願ひする取り組みです。会員の皆様の力によって、様々な企画や稽古の場となるメタモルホールを維持し運営することができています。

現在、2018年賛助会員を募集しております。

年会費

個人会員(年会費) ー□ 5,000円

法人会員(年会費) ー□ 20,000円

〈ご入会方法〉 下記いずれかの方法をお選びください。

郵便振替

同封の振替用紙に以下の項目をご記入のうえ、お振込み下さい。

・お名前 ・ご住所 ・お電話番号(任意) ・メールアドレス(任意)

PayPal

メールアドレスとクレジットカードをお持ちの方はホームページよりご利用いただけます。劇団態変HP → 日本語TOP → 「賛助会員制度」にお入りください。

会員特典

- ・会員証発行
- ・劇団態変公演映像DVD進呈(毎年1回当該年の公演ダイジェスト映像)

(個人会員特典)

チケット料金500円割引

(何度でもご利用可能です)

(法人会員特典)

一作品1名様ご招待

NHKハートネットTV ブレイクスルー File.91

革命の身体表現

身体障害者の劇団 “態変” ・ 金満里

劇団態変が
NHKの番組で
紹介されます

ついに、劇団態変が地上波、NHK 教育テレビに登場します。

金満里への密着取材、2ヶ月にわたる撮影で、芸術創造の核となる部分を様々な角度から探るドキュメンタリー映像とスタジオ収録でのトーク、合わせて29分間の番組です。スタジオでのホストはAIさん(歌手)・風間俊介さん(俳優)。

これまで会うことができなかった人とも出会える、革命のタイトルにふさわしい放送となることへ期待をこめて。ぜひ、ご覧ください!

放送日

Eテレ
NHK教育

11月27日(月)
20:00~20:29

再放送

12月4日(月)
13:05~13:34

出版物のご案内

最新刊

劇団態変の世界

身障者の「からだ」だからこそ

論創社

定価：本体2,000円＋税

情報誌イマージュにこれまで掲載された金満里と多くの著名人、表現者、研究者の方々と
の対話から厳選して、高橋源一郎、松本雄吉、大野一雄、竹内敏晴、マルセ太郎、内田樹、
上野千鶴子、鶴飼哲各氏とのものをまとめました。

そして、これまで34年間の劇団態変の活動を簡潔に描き出します。劇団活動34年、イマ
ージュ発行20年の間には、9.11や3.11、多くの震災、障害者をめぐる問題、近くは相模原
事件など、さまざまな世の中の動きがあり、金満里の対話はそれらを反映しています。劇団
態変の活動の金満里らの言葉を通して、「現代」に鋭く切り込む本書にご期待ください。

全国の書店でお求め下さい。『翠晶の城』公演会場でも販売します！



情報誌イマージュ VOL.69

今秋発刊予定

クロスオーバー談義 金満里×永山愛樹

土着と浮遊の悪所 ～ぼくらがもっともって生きるための

「橋の下世界音楽祭」は、毎年5月に豊田大橋の袂に突如出現する夢の国。ホームページには、「至って平和的、かつ精神的にも健全、もしくは健全さとやる気を取り戻す為の、全国的にも稀に見る社会の船底に住む穴空き者達の作る、優良、かつ自発的に自治された健全で安全な悪所【ルビ=あくしょ】」とある。

国内外からパンク、ブルース、民族音楽などの垣根を超えた実力バンドが多数出演。しかし入場無料の投げ銭制。河川敷で刈った800本の竹と街中から集めてきた廃材でボランティアの大工・職人さんが新しい「街」を一つ創ってしまう。会場で使われる電力はすべて会場に仮設の太陽光発電でまかなわれるが、不足のおりはアコースティックに切り替えるシンプルさ。

6回目となる2017年は、劇団態変も『幻視の郷(げんしのごう)』で初出演。二日目の逢魔が刻の舞台で「浮遊性と土着性の葛藤」を表現したのだが、この破天荒な野外祭典への身障者劇団招聘を1年足らずの準備でやってのけたエネルギーに重ねて脱帽。

今回登場の永山愛樹は、その中心人物である。

特集 Let's get together and feel all right! 集まろう、OKだと感じ合おう！

いろんなやつがいて、いろんなことをやっていて、

みんなそれぞれに素敵だよ。

今の情勢、いけないことが多すぎて、辛かったり、消沈したり、腹立ったりするけど、

みんな集まって、みんなOKだ！ と認め合える、そんな場を創っていきたいな。

そういう想いを込めて、この特集を組んでみた。

表題は、ボブ・マーリーの「One Love」からもらったぜ。

[多様性を求めて ～ヘイトスピーチデモのカウンターから生まれた祝祭～ (ミナミダイバーシティフェスティバルと幻のダイバーシティパレード)] C.H.A.R. / [ジゴクバケイイノチノタワムレ (橋の下世界音楽祭)] 井上佐和子 / [二都物語 踊る体に幸あれ (東京レインボーパレード、ソウルクィア文化祭)] 金相佑 / [韓国全土に広がるLGBTムーブメントのうねり ～クィア・パレードの現場から～] 植田祐介

【情報誌イマージュ】 1冊：500円/年間購読 1500円 (年3回・送料込)

<購入方法> 同封の郵便振替用紙以下をご記入の上、お振込み下さい。

・振込人住所氏名 ・送付ご希望の住所氏名 ・電話番号 ・メールアドレス (任意) ・物品名 ・数量

1991年9月3日 第三種郵便物承認 毎月(1・2・3・4・5・6・7・8の日)発行

公演・チケット予約 ご案内

アイホール提携公演・劇団態変第66回公演

翠晶の城 -さ迷える愛 序

作・演出・芸術監督 金満里
 演奏 中島直樹 (コントラバス)
 音 かつふじたまこ
 出演 金満里 小泉ゆうすけ 下村雅哉 向井望
 松尾大嗣 小林加世子 渡辺綾乃

会場 AI・HALL (アイホール)
 兵庫県伊丹市兵庫県伊丹市伊丹2丁目4-1 ☎072-782-2000

チケット

[前売] 一般：3500円 / U22 (22歳以下・劇団扱いのみ)：2000円
 障害者・介助者・シルバー (劇団扱いのみ)：3000円 ※車イス席は席数限定・要事前予約
 [当日] 一般：4000円 / 障害者・介助者・シルバー：3500円 / U22：3000円

チケット取扱

- ①劇団態変 ※公演当日会場での精算
 TEL/FAX 06-6320-0344 E-mail taihen.japan@gmail.com
- ②Confetti(カンフェティ) ※一般チケットのみ取扱い (コンビニでチケット発行：手数料)
<http://confetti-web.com/taihen> 0120-240-540 (平日10:00~18:00)

劇団態変web予約フォーム



協賛 アソシエ協同会館

AI・HALL (アイホール) へのアクセス

- ・JR「伊丹駅」前 / 阪急「伊丹駅」より東へ 徒歩7分
- ・JR「大阪駅」より宝塚線利用 「伊丹駅」下車 所要約15分
- ・阪急「梅田駅」より神戸線「塚口駅」乗換伊丹線「伊丹駅」下車 所要約30分
- ・新幹線「新大阪駅」より在来線乗換→JR「尼崎」乗換または直通→「伊丹駅」下車 所要約22分
- ・阪神高速「豊中北出口」より車で6分
- ・大阪国際空港 (伊丹空港) より伊丹市営バス51系統・JR伊丹行き→「本町」バス停下車 徒歩6分

